

南の島と幼い命が教えてくれた、時間とのつき合い方

効率だけを追っていると大切な価値観を見失う

霞が関のズレた時間感覚が日本の未来を暗くしている

「休養宣言」をして、ニュース番組のキャスターを昨年の九月いっぱいまで降りたので、野中は暇になったと思っていっぱいしゃる方も多いようですが、けっこう忙しいんですよ(笑)」と語るの、ジャーナリストの野中ともよさん。この四年間、月曜〜金曜の毎晩十一時から『ワールド・ビジネスサテライト』(テレビ東京系)でキャスターを務めていた。それだけでなく、大学の先生、政府の審議会委員、講演会の講師、翻訳業など、じつにさまざまな仕事をこなしてきた。家庭では一児の母。毎朝六時に起きて六歳の娘さんの弁当をつくり、幼稚園へ送り迎えをする。平均睡眠時間は三時間半だったという。

野中ともよ

のなかともよ ●ジャーナリスト

PROFILE

東京都生まれ。上智大学文学部新聞学科卒業後、同大学院へ。その後、米コロロンビア大学大学院へ留学。帰国後、「クロワッサン」「エル・ジャポン」「ブルータス」などの雑誌でフォトジャーナリストとして活躍。79年からNHK「海外ウィークリー」「サンデースポーツペシャル」などのキャスターを務める。87年より中京女子大学客員教授。92年より96年9月まで、テレビ東京「ワールド・ビジネスサテライト」のキャスターを務める。おもな著書に「ガンバレ、自分!」(三笠書房)、「アイアン・ジョンの魂」「私たち「地球人」」(ともに集英社)、「チェンジング」(徳間書店)など。

ず忙しいので、娘からは『お仕事辞めたんじやなかったっけ?』と、恨めしそうに睨まれます(笑)」。昨年十一月は多忙を極めたという野中さん。その原因は、大蔵省の財政制度審議会の委員をはじめとして、多くの政府審議会の委員を務めているためだ。とくに予算編成の時期だったことと、行革推進が霞が関の課題となっていた時期でもあり、連日のように委員会に出席したという。

「娘には恨まれましたけれど、これも長い時間の流れのなかで考えれば、娘のためなんです。いま、行政改革が進まなければ、娘の時代には日本は相当ひどい国になるぞ、という危機感があつたからこそ、委員会には積極的に出席したんです。私が噛みついたところで、『ごまめの歯ざり』にもならず、『ごまめの歯ざり』程度の影響しかないでしょう(笑)。いまいわなければどうする、という使命感だけはありました」。

委員会に出席して、野中さんがいつも痛感するのは、霞が関や永田町の時間感覚が、一般とかなりズレていることだ。

「私たちの時間感覚は、未来へ進むことを前提にしていますよね。よりよい方向へ個人や家族や社会が進むために、時間をいかに有効に使うかを考えますでしょ。ところが、お役人の場合、いかに過去の「化石」を壊さずに、次の人へ渡していくかが大事なんです。つねに過去へ、過去へと適って、「判例がございません」「やったことがございません」という(笑)。行革にしても、私たちがいまのポストにいるあいだは、できればしたくございません」ということなんですね」。

行政改革を断行するには、霞が関や永田町で働く人たちの「時間感覚」を、まず変えなないとダメなようだ。

何もしないで過すのは果たして悪いことなのか?

休養期間もなく活動する野中さん。しかし、時間に対する感覚は、少しずつ変化してきたという。

「いままでは、講演で『生まれたときからすでに、死という終着駅に向かって人生はほとんど少なくなっているのだから、焦っても仕方がない。辛い、苦しい、と思つているあいだにも、人生は減つていくのだから、時間を有効活用して人生を楽しみましょう。借金返せなくて辛い人も、借金があるからやル気が出てくるんだと思えば、借金ありがとう」と思えるようになります。笑顔で楽しんでいました。これが野中の時間感覚だったんです。でも、いまではそんな自分がおどましくもあり、可愛くも思えます」。

野中さんがそう思うようになったのは、休養宣言後のこと。「暮れにタヒチへ出かけたんですが、よくも悪くもフランスの香りが色濃いところ。私も世界のいろいろなところに行きましたが、英語が通じなかったのは中国を旅行して以来です。来ている人たちも、英語文化圏の人はほとんどいないんです」。

リゾートのあり方も、ハワイなんかとは明らかに違う。静かな海辺で、何もせずに過ごす。ポリネシアン・ミュージックさえも聞こえず。排泄する、愛し合うといった、肉体に一番根ざした時間を削るしかないわけです。その結果、私は一人目の子供を流産で失った……。きつと、天から神様が見たら、いままでの私の人生は、ハツカネズミが迷路をいかに抜けることができるか、という実験と同じように見えるんでしょね(笑)」。

人間は存在するだけで意義のあるものだと実感!

昨年の夏の流産が、野中さんに「休養宣言」を決意させた一因ともいえる。それだけに、命に対する思いは強い。

「この世には、時間を有効に使ひ、努力して成果をあげることが善」という価値観とは別の価値観があると思うんです。それは、命という存在を地球という星の上にもつたこと自体がすごいことだ、というものです。そういうことを突き詰めて考えていくところに、宗教が存在するんだと思います。自分が存在する証を、地球という星の上でどう捉えるか——なんて考えていくと、座禅を組んだり、修行をしたりと、究極のところへ行つてしまふ。それも怖い、と思ひますが、私がいままで持っていた時間感覚の対極が、たしかに存在する。しかも、人間の頭脳には、宇宙規模で自分の存在を考へることが出来る時間、空間もあるんだ、とタヒチでは肉で感じる事ができました。知識ではそういう世界があることを知っていましたが、身体で感じることは許されていませんでしたから……。でも、母親が座禅を組んでいたから、子供は死んでしまひますものね(笑)」。



写真撮影：藤谷清美

「一番簡単な時間抽出法は、テレビを消すことです。テレビがないほうが、自分にとってほんとうに必要な情報が見えてきます」と語る野中さん

てこない。それでいて、飛行場の小さなカフェテリアのクロワッサンがパリの味なんです。フランスの経済的植民地支配といつてしまえばそれまでなんです。フレンチのノウハウ、時間が、タヒチのリゾートには流れています。海辺で過ごす人たちを見てると、何もしないのがパカンスなんだな、と改めて確認させられました」。

野中さんは学生時代に聞いた「小咄」を思い出したという。「いろいろなバージョンがあるみたいですけど、M&Aかまびすしい頃、南太平洋の孤島にあるリゾートにやってきたアメリカのCEO(最高経営責任者)の話です。彼は日がな一日、来る日も来る日も椰子の木の下に座つてポーツと海を眺めている青年を見つけて、説教をした。『せっかくだ、いい身体をしてい